

わたしのせいじゃない

2025.6.9 校長 西谷 秀幸

6月は、「ふれあい月間」と言って、「友達と助け合い、みんなで仲良く生活して、いじめを絶対にしないでいこう」と確認する大切な1か月です。そこで、今日は「わたしのせいじゃない」という外国の絵本を読みます。本当に「わたしのせいじゃない」のかどうか、考えながら聞きましょう。（スライドで読み聞かせをする。）

わたしのせいじゃない ―せきにんについて―

学校のやすみじかに あったことだけど
わたしのせいじゃないわ

はじまったときのこと みてないから
どうしてそうなったのか ぼくは知らない

ほんとうは わたし みたの だから しってるの
でも とにかく わたしのせいじゃないのよ

ぼくはこわかった なにもできなかった
みているだけだった

おおぜいでやってたのよ ひとりではとめられなかった
わたしのせいじゃないわ

おおぜいでたたいた みんなたたいた
ぼくもたたいた でも ほんのすこしだけだよ

はじめたのは わたしじゃない ほかのみんなが たたきはじめてたのよ
わたしのせいじゃないわ

自分のせいじゃないか その子が かわってるんだ
ほかの子はみんな ふつうなのに

考えることがちがうんだ ぜんぜんおもしろくないんだ 自分のせいだよ

その子は ひとりぼっちで立っている
おまけに目をとろんとさせて 泣いているんだ

泣いている男の子なんて さいていよ おもしろくない子なのよ

先生に いいつければいいのに よわむしなのよ
わたしには かんけいないわ

そんなことがなかったら その子のこと ほとんどわすれていたわ
なにもいわないんだもの

ひとことも しゃべらなかった ぼくたちを みつめていただけだった
さけばばいいのに

たたいても わたしは へいきだった みんな たたいたんだもの
わたしのせいじゃないわ

わたしのせいじゃない？

さあ、どうでしょうか。本当に「わたしのせいじゃない」のでしょうか。でも、みんな
で知らんぷりをしたり、みんながやったからやったんだ…と逃げたりしていますね。

いじめをなくすには、「自分は関係ない…」「みんながやっているから…」とか、そう
いうのはダメです。皆さんのまわりには、いじめはありませんか。「あれ？それって、も
しかしたらいじめじゃない？」と思うような差別や嫌がらせはありませんか。

いじめをなくすにはどうしたらいいか、また、みんなが楽しい仲良しなクラスにするに
はどうしたらいいか、それぞれのクラスで話し合ってみましょう。

これで朝会話を終わります。

（裏面に「先生方へ」があります）

〈先生方へ〉

6月・11月・2月は東京都教育委員会の「ふれあい月間」です。そこで、「わたしのせいじゃない」という絵本の読み聞かせをしました。

これはスウェーデンのレイフ・クリスチャンソンという人がかいた絵本です。作者は現在、作家活動に専念していますが、元教師で教育長もやったことがある人です。スウェーデンの学校には、「オリエンテーリング科」という教科があり、人間の生き方や社会のさまざまな問題に目を向ける時間として、この本も使われるそうです。日本では1996年に発行され、2015年には29刷になるほどよく読まれています。また、板橋区も採用している6年道德の教科書（日本文教出版）にも掲載されています。

この本には、いじめの状況とともに責任のなすりあい描かれています。それぞれの子の発言はどうだったのかなど、クラスでも指導してくださると助かります。

さて、いじめには、大きく分けると3つの立場があります。「いじめる子」「いじめられる子」、そして「いじめを見ている子、知っている子」です。「いじめる子」への指導は言うまでもありませんが、「見ている子、知っている子」への指導も普段から大切にしなければなりません。「自分は関係ない」「自分はやっていない」などの傍観者的な態度をとらせず、「ダメなものはダメ」と言えるようにしておくのです。決して簡単なことではありませんが、日頃から「いじめへの指導」を繰り返していくことで、そういう子が育ってきます。

また、いじめる側は、いじめを知られないように、教師に話す行為を「チクる」と言ってプレッシャーをかけてきます。いじめを報告することは「チクる」ではなく、「進言」と言って、とても素晴らしい行為であることを日頃から指導しておくことも大切です。

さらに、子供から情報を得る手段をもっておいってください。「自分は子供のことをよく知っているから大丈夫」…これは過信です。「自分は子供たちのことをあまり分かっていない」、そういう謙虚な気持ちを常にもっていきましょう。

その1つの手段として、毎日書かせる日記があります。その中から、子供たちの人間関係の情報を得るのです。また、休み時間に子供たちと遊ぶ、給食の時間にいろいろな班と一緒に食べる、2週に1回は放課後に何人かと話をする、代表委員の子とクラスの様子について常に情報交換をするなど、様々なチャンネルをもってやっていくことが大切です。

なお、「異性のことは異性に聞く」のが鉄則です。男子のいじめは女子から、女子のいじめは男子から情報を得るのです。いじめは、日頃の指導で早期にその芽を摘むことができます。日常の指導をしっかりと継続してください。

板橋区では、「いじめに関する授業」を年3回行うことになっており、そのうちの1回は学校公開で授業を公開します。各クラスでの指導をよろしくお願いします。

【資料】 訳者あとがき ― にもんじまさあき ―

この本はスウェーデンで生まれたシリーズの1冊です。原著ではすでに15冊以上がロングセラーで刊行され、一般書店のほかデパートのギフトコーナーにも置かれています。

広い意味での「人間の生き方」を扱い、日常の、ふとしたきっかけから深い思索を誘うタイプの内容です。

このシリーズの背景には、スウェーデンの学校で行われている「オリエンテーリング科」という教科があります。人間の生き方を模索しながら、同時に社会のさまざまな問題にも目を向け、友情、孤独、幸福といった人間関係の大切なテーマが扱われています。

『わたしのせいじゃない』は、このシリーズのなかでもやや特異なシリアスな内容を備えています。いじめの状況と、その責任のなすり合いが描かれ、後半の写真は多くのことを語りかけてきます。

日本でも「いじめ」は社会問題になっています。事態を改善するために話し合うきっかけとして、教室で、家庭で、この本が生かされることを心から願っています。